



本市の 構成文化財マップ

みやのまえ文化の郷

- 柿衛文庫 1
- 美術館
- 工芸センター
- 旧岡田家住宅・酒蔵 4
- 旧石橋家住宅 5

拡大図



※みやのまえ文化の郷は、リニューアル工事のため休館しています。令和4年春には博物館が機能移転し、リニューアルオープンする予定です。

伊丹市へのアクセス

◆中心市街地へは

- 大阪駅(JR)から伊丹駅(JR)……約15分
- 大阪梅田駅(阪急)から伊丹駅(阪急)……約20分
- 大阪国際空港(伊丹市営バス)からJR伊丹(伊丹市営バス)……約30分
- 大阪国際空港(伊丹市営バス)から阪急伊丹(伊丹市営バス)……約22分

◆鴻池へは

- 大阪駅(JR)から中山寺駅(JR)……約25分
- JR中山寺(伊丹市営バス)から鴻池(伊丹市営バス)……約10分
- もしくは
- JR伊丹(伊丹市営バス)から鴻池(伊丹市営バス)……約20分
- 阪急伊丹(伊丹市営バス)から鴻池(伊丹市営バス)……約15分

伊丹

発祥の地

清酒

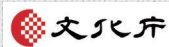
「伊丹諸白と灘の生一本」
下り酒がほんだ銘醸地、
伊丹と灘五郷



阪神間日本遺産推進協議会

事務局：伊丹市総合政策部空港・広報戦略室都市ブランド・観光戦略課
〒664-8503 兵庫県伊丹市千僧1-1 TEL(072)744-2088

令和2年度文化資源活用事業費補助金観光拠点整備事業(地域文化財総合活用推進事業)



ストーリーのタイトル

いたみおろはく なだ きいっぼん
「伊丹諸白」と「灘の生一本」
くだ ざけ う めいじょうち いたみ なだごろう
下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷

本市の構成文化財

- 1 摂津名所図会
- 2 日本山海名産図会
- 3 鴻池稲荷祠碑
- 4 旧岡田家住宅附棟札、金屋及び洗い場、搾り場
- 5 旧石橋家住宅 伊丹郷町遺跡発掘調査出土品等
- 6 小西酒造「長寿蔵」(白雪ブルワリービレッジ長寿蔵)
- 7 酒樽・桶づくり用具一式(樽丸づくり用具を含む)
- 8 このえけいしよかんけいしりよう
近衛家会所関係資料
- 9 こにしんうえもんしもんじょ
小西新右衛門氏文書
- 10 いたみ しゅうようぐおよ かんけいしりよう
伊丹・酒造用具及び関係資料
- 11 ありおかじょうせき いたみごうちょういせき
有岡城跡・伊丹郷町遺跡
- 12 せつしゅういたみさかだるめいかん
摂州伊丹酒樽銘鑑
- 13 ばしやうたんざくほはいかいしりよう
芭蕉短冊他俳諧資料
- 14 なざなた(修武館)

※位置は構成文化財マップ参照

日本遺産とは

「日本遺産(Japan Heritage)」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。日本酒がテーマのストーリーの認定は今回が初めてです。

ストーリーの概要

江戸時代、伊丹・西宮・灘の酒造家たちは、優れた技術、良質な米と水、酒輸送専用の樽廻船によって、「下り酒」と称賛された上質の酒を江戸へ届け、清酒のスタンダードを築きました。酒造家たちの技術革新への情熱は、伝統ある酒蔵としての矜持と進取の気風を生み、「阪神間」の文化を育みました。六甲山の風土と人に恵まれたこの地では、水を守り米を育てる人々、祭りに集う人々、酒の香漂う酒造地帯を訪れ、蔵開きを楽しむ人々が共にあり、400年の伝統と革新の清酒が造られています。



お土産情報

白雪ブルワリービレッジ長寿蔵ショップ

☎: 中央3-4-15

☎: 072-773-0524



市立観光物産ギャラリー

☎: 東有岡1-6-2 (JR伊丹駅改札横)

☎: 072-770-7060



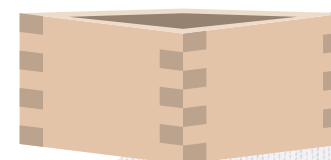
伊丹老松酒造株式会社直売所

☎: 中央3-1-8

☎: 072-782-2470



QRコードから
伊丹のお酒が
買える・飲める
店舗情報が
確認できます



清酒は「鴻池」から

伊丹市鴻池の山中家の屋敷跡とされる公園に建つ、江戸時代につくられた「鴻池稲荷祠碑」(市指定文化財)には、「山中家は酒造によって財をなし、慶長5年(1600)頃から200年も続いている。山中家始祖新六幸元は、はじめて清酒を造り、江戸まで出荷した。」という旨が刻まれています。白く濁った「濁酒」ではない「澄酒」が生み出された、「清酒発祥の地伊丹」を今に伝えます。新六は、尼子家に仕え、同家の再興を願った山中鹿介の子で、戦乱を逃れて鴻池の親戚を頼ってきたと言われています。この清酒誕生のエピソードは、「下男が主人に叱られた腹いせに、濁酒の仕込まれた桶に灰を投げ入れたところ、酒が濾過され澄酒になり、これをヒントに新六は新酒を造り始めた」というものですが、これは随筆「摂陽落穂集」の脚色であるという指摘もあります。



「亀趺」(きふ)に、中国古代貨幣「布貨」形の碑が建っています。

江戸時代の伊丹酒

日本各地の名産物を紹介する「日本山海名産図会」(1799年刊行)の第1巻には、伊丹酒について記されており、江戸時代における伊丹での酒造工程が詳しく説明されています。同書では、伊丹酒が「丹釀」「伊丹諸白」ともてはやされ、特に江戸で好まれたことが書かれています。伊丹酒が高いブランド力を誇っていたことを示す史料です。



「日本山海名産図会」(伊丹市立博物館蔵)

伊丹酒のブランド

酒にはそれぞれ酒銘がつけられており、酒樽は酒銘の刷られた薦で包まれていました。伊丹酒は希少で高価だったため、伊丹酒の酒銘を模したまぎらわしい品や、酒銘自体を盗用した「贗酒」が出回りました。伊丹の酒造家たちは、贗酒が発見される度に、自家酒銘を変えるなどといった対応に追われました。

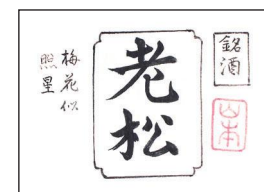


伊丹御改所焼印(伊丹市立博物館蔵)

領主近衛家は贗酒と区別するために、伊丹酒には「伊丹御改所」と刻まれた焼印を用いるよう指示しましたが、江戸時代を通して、贗酒が完全になくなることはありませんでした。

伊丹酒だった「剣菱」

元禄15年(1702)、赤穂浪士が吉良邸への討ち入り前に、江戸で出陣酒として剣菱を飲んだという伝承があります。赤穂浪士の討ち入り事件を題材にした歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」は、現在も人気の演目です。その中の大星由良之助(主役/大石内蔵助がモデル)の「酒を持て」という台詞は、かつては「剣菱を持て」であったとも言われています。剣菱の酒蔵は、昭和初め頃まで現在の伊丹市立図書館本館ことば蔵の位置にありました。



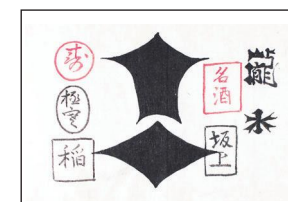
「摂州伊丹酒樽銘鑑」より「白雪」と「老松」(伊丹市立博物館蔵)

伊丹郷町について

有岡城の城下町を基盤として、伊丹町とそれに隣接する14か村が「町村家続き」となった在郷町(商工業集落)となります。これを伊丹郷町といいます。寛文元年(1661)、伊丹郷町の大部分は近衛家領となりました。伊丹郷町は、領主近衛家の庇護のもと、

江戸積酒造業で繁栄していきます。

さらに元禄10年(1697)、酒造家を取り仕切っていた「酒家年行事」24人が「惣宿老」の称号を与えられ、江戸時代を通して、近衛家の指示を仰ぎながら町政を担っていきます。

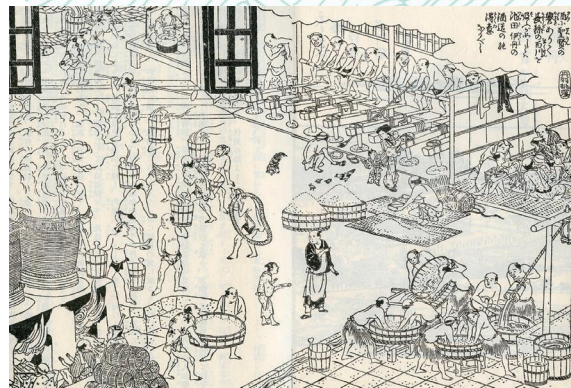


「摂州伊丹酒樽銘鑑」より「剣菱」(伊丹市立博物館蔵)

江戸時代のガイドブックに、伊丹酒の紹介

江戸時代に刊行された、摂津国の名所を回りで紹介する「摂津名所図会」には、酒の名産地として伊丹が挙げられており、「みな美酒数千石を造りて諸国へ運送す」と記載されています。

同書では、足踏み精米をする人、洗米をする人、米を蒸す人など酒造りに従事する伊丹の蔵人の様子が生き生きと描かれています。



「摂津名所図会」(伊丹市立博物館蔵)

江戸への出荷方法とルート

人口増加とともに国内最大の消費地となった江戸には、上方から大量の「下り酒」が運ばれました。

海に面していない伊丹は、①伊丹から神崎(現尼崎市)へ馬で運び(駄送り)、②神崎から天道船に積み替えて伝法(現大阪市)へ、③伝法から沖に停泊する樽廻船に積み替え、江戸まで輸送する必要がありました。

伊丹の酒造家たちは、①馬借(馬で荷物を運搬する輸送業者)、②神崎船問屋、③伝法船問屋(樽廻船問屋)などに対し、酒造家の荷主としての権益を主張し

ていかなくはなりません。

また、伊丹から神崎までの輸送ルートとして、猪名川を使った河川輸送(猪名川通船)は江戸前期から幾度となく申請されてきましたが、馬借の反対によって長い期間実現されませんでした。しかし天明4年(1784)に幕府がようやく許可したことによって猪名川通船の運航が始まります。猪名川通船では、駄送りによる輸送方法よりも数多くの荷物を安価に運ぶことができました。



樽廻船模型(伊丹市立博物館蔵)



新酒番船入津繁栄図(伊丹市立博物館蔵)

伊丹酒とぼれ話

「駄六川」の由来

川湊(現JR伊丹駅北西)を通り猪名川に合流する川を駄六川^{だろくがわ}といいます。これは、この川を利用して船で酒荷を運んだ際、6駄(駄送りで馬の両側に1駄ずつ積むことから、1馬が2樽運ぶ単位を1駄としました)を1度に運んだことに由来するという説があります。

酒造家が育んだ文化

酒造家の繁栄により経済的に潤った伊丹郷町には多くの文人が訪れ、酒造家を中心に、町人たちは諸芸に親しみました。

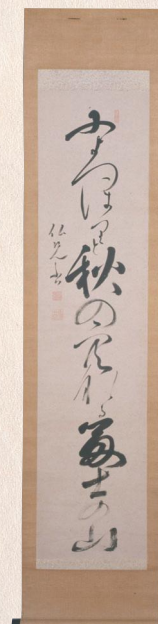
伊丹郷町で随一の酒造家であった上島家(油屋)に生まれた上島鬼貫^{おにつら}(1661-1738)は、のちに俳人として活躍します。彼は松尾芭蕉と並んで、「東の芭蕉・西の鬼貫」と称され、「誠のほかに俳諧なし」という悟りを開きました。

大坂出身の思想家・文人として名高い頼山陽(1780-1832)も、伊丹の酒に魅せられ、たびたび伊丹へと足を運んだと言われています。柿衛文庫には、頼山陽が大いに気に入ったとされる「台柿」より接ぎ木した二世の木が、現在も残されています。



蕪村筆「俳仙群会図」より鬼貫像(柿衛文庫蔵)

いよいよ
秋の空
ふたの山



鬼貫筆「いよいよ」と句一行物(柿衛文庫蔵)